



聖路加国際大学に寄贈された日野原重明先生の遺品

池田裕子

創立 125 周年を記念し創設された「関西学院賞」の第 1 回目の受賞者である日野原重明先生 (1911～2017) の遺品 (資料、写真、愛用品等) が、ご逝去から 1 年経った 2018 年 8 月、ご遺族より聖路加国際大学に寄贈されました。以来、同大学の大学史編纂・資料室が他の業務と並行しながら、膨大な量の資料整理に取り組んでおられます。

「幼稚園時代のものまで残っていますよ！」との知らせを遺品の整理・登録作業を担当されている大鹿小百合さんから受けた時、ご本人だけでなく、お父様の善輔さん (1877～1958) に関する資料も残っているのでは…との期待に胸が躍りました。日野原先生は、原田の森時代の関西学院で学ばれました (1929 年中学部卒業) が、そのお父様も本学出身 (1896 年普通学部卒業) で、現在の神戸栄光教会の牧師を務められた方だからです。お父様に関しては、創立初期の関西学院の様子を伝えるエピソードがあります。卒業の 1 年少し前、腸チフスに罹った善輔さんは、吉岡美国第 2 代院長の手厚い看病を受け、快復されました。それまでに何人もの寄宿生を病気で亡くしていた吉岡院長は、「もう殺さない、わしの家で自分で看病してなোস」と言って、善輔さんを戸板に乗せ、自宅 2 階に運び、3 カ月半家族ぐるみで看病したそうです。

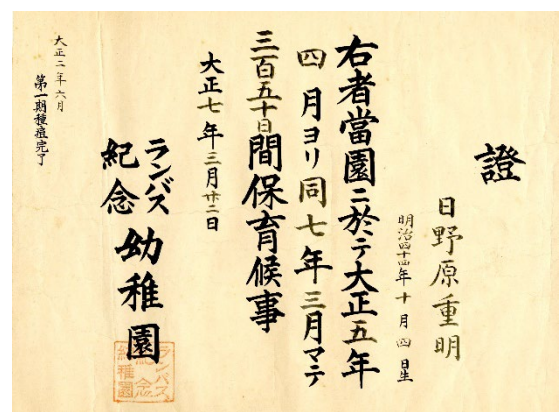
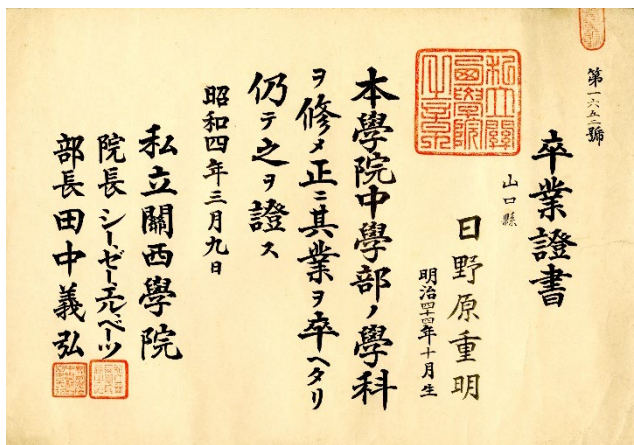
6 月 25 日、東京築地の聖路加国際大学を訪問し、トイスラー記念館 1 階で遺品の一部を拝見させていただきました。聖路加国際病院の名誉院長をされていた日野原先生が生前可愛がっておられた人形が、先生お気に入りの場所に座って、心配そうに様子を見守ってくれました。



日野原重明名誉院長お気に入りの席に座る人形



関西学院時代の写真アルバムを手にする大学史編纂・資料室の皆さん
大鹿小百合さん、武藤賢一さん、新沼久美さん



たくさんの写真の中には、新聞や雑誌で目にしたものもありました。右は、1970年に起こった日航機「よど号」事件の人質となった日野原先生が3日後、金浦空港で解放され、無事羽田に帰還された時のものです。機内で、「ハイジャック」の意味を説明できなかった犯人（共産同赤軍派）に対し、「ハイジャックする人が説明できないとはおかしい」と言って、代わりに説明したのが日野原先生でした。また、機内で具合の悪くなる人が出たため、乗客の健康診断も行ったそうです。

次は、諏訪山尋常小学校（後の神戸市立諏訪山小学校）入

学前に撮影された父子の写真です。



先生は、6人兄弟の次男でした。「父からは大きなビジョンを持つことを学んだ」と語っておられたそうです。

関西学院中学部では、YMCAとグリークラブと弁論部に入部しました。授業に関し、同窓会東京支部の取材にこう答えておられます。「印象に残るのは英語教育と音楽ですね。…卒業後進学した三高では先生がイット、イズ、と棒読みのひどい発音で、ぼくはびっくりしてねえ、ああ、関西学院の英語は素晴らしかったなと感謝したものです」（『Copains』vol. 5、関西学院同窓会東京支部、2001年）。3年生の時、病床で書いた「自己を恐るゝ者」という作品があることから、書くこともお好きだったようです。

第三高等学校に進学すると、文芸部に入り、仲間と詩集や随筆文集を出すようになりました。フランスの前衛的な詩に傾倒していた様子がうかがえる同人誌も残されていました。本名ではなく、「月野重秋」というペンネーム

ームを使って発表されたものも見受けられました。

最初に私が期待を抱いたお父様に関する資料としては、米国ノースカロライナ州のトリニティ・カレッジ（現・デューク大学）留学時代の写真が目に残りました。善輔さんは、1901年7月に渡米し、1904年6月にBA、翌年6月、MAの学位を取得しました。



帰国後、関西学院礼拝堂で金子満子さんと結婚しましたが、1911年5月に再び渡米し、ニューヨークのユニオン神学校に入学しました。日野原先生が生まれたのは、この2度目の留学中だったため、「重明」と命名されたそうです。

日野原善輔さんの生涯は、「関西学院の人びと 14」で紹介されています。それに続き、次男の日野原重明先生による特別寄稿「私と 関西学院」も掲載されています（『関西学院史紀要』第14号、2008年）。

★6頁冒頭と下2点、7頁上、中央左、下の画像（計6点）は、聖路加国際大学大学史編集・資料室からご提供いただきました。

【学院史編集室】